

筑波大学医療科学類の取り組み

森川 一也* Ho Kiong* 福田 綾* 沖田 結花里*
大根田 修* 二宮 治彦* 久武 幸司*

はじめに

筑波大学医学群(医学類、看護学類、医療科学類)の人材養成目的には「良き医療人、すなわち優れた医療技術のみならず、しっかりしたコミュニケーション能力に裏打ちされた全人的対応のできるグローバルスタンダードに則った医療人、さらには医学、看護学、医療科学の分野における世界レベルの研究者を養成します。」とある。特に

「世界レベルの研究者養成」は医療科学類のミッションの一つである。医療科学類生は3年次から医療科学主専攻か国際医療科学主専攻かのいずれかを選択し、前者では臨床検査学に、後者では医科学研究に重点をおいたカリキュラムとなるが、主専攻に関わらず積極性、国際的コミュニケーション力、研究力を系統的に修得できるようカリキュラム改訂を継続しており、国際交流活動は、その中で重要な位置づけとなっている(図)。本稿



医療科学類の国際教育カリキュラム

図 世界レベルの研究者養成のための国際教育カリキュラム

国際コミュニケーション力、主体的活動力、研究力の強化・実践のための一連の科目、コースを取り入れている。派遣、受入は東南アジアの協定校・機関を中心に実施している。低学年で主体性・積極性を伸ばす必要があると考えカリキュラム改革を継続している。

*筑波大学医学医療系医学群医療科学類

では国際交流活動(①受け入れおよび②派遣)とその効果について紹介させていただく。

I. 受け入れ:

アジア留学生との協働医科学研究体験 — Undergraduate Medical Science Course in Tsukuba (Sakura Science Plan) —

医療科学類生(主に2年生)と留学生が協働する医科学研究体験コースである。ベトナム、台湾、インドネシア等の医学部、薬学部、臨床検査学部、バイオテクノロジー学部などの大学生や理系高校生10~20名程度が、本学類生とペアとなって一週間程度活動する。各ペアは病理学、感染生物学、生理学などそれぞれ異なる医学系の研究室において、実際の研究・実験等に取り組む。本学MECC (Medical English Communication Center) 教員の指導を受けつつ、プレゼンテーションの準備と発表も二人で行う。つくば市の関連研究所での研究紹介も行う。両国学生にとって医科学領域のキャリアデザインにグローバルな視点を与える機会を提供するものとして、JST さくらサイエンスプランの支援を受けて継続している。医療科学類生にとっては主専攻選択・ラボ配属(国際医療科学主専攻では3年次から研究を開始する)の前に研究を体験することのできる機会としても役立っている。活動単位がペア(二人)である点は、留学生との直接コミュニケーションを促しており、特に英語力や積極性がまだ十分でない低学年生には有効である。

II. 派遣: 国際医科学トレーニングコース — Medical Science Training Courses in Partner Universities —

医科学分野のキャリア計画にグローバルな視点をより具体的に持たせ、学習意欲を刺激することが目的である。近年はベトナムにおいて、①現地の研究課題に取り組む研究室体験、②薬剤耐性菌問題を考える感染症ワークショップ、などを行っている。主に2・3年生に希望者を募り、語学力、成績、意欲を評価して選抜している。1年生も応募があれば、なるべく引率教員が手厚くサポート

できる1~2名程度を参加させることにしている。現地で悔しい思いをする学生もいるが、実際に経験することの教育効果は高く、その分頑張る進学するところには英語でディスカッションも出来るようになって行く。ただし、あまりにもコミュニケーションがとれないと逆効果になるので、選考では日常の英語力や態度をよく観察して「まだはやい」とか「そろそろ行かせてみようか」などと教員間で議論する。

A. ホーチミン市医科薬科大学での研究体験

受け入れコースと同様の研究体験で、現地大学生とペアまたは少人数グループで活動する。また病院や検査部門等を見学し、現地の医療事情を学ぶ。医療科学類専任の引率教員も同行してプレゼンテーション指導を行っている。

B. バイオテクノロジーセンターでの感染症ワークショップ

薬剤耐性菌問題を考えるワークショップをホーチミン市バイオテクノロジーセンターで行っている。医療科学類生6名程度が現地参加者に混ざってグループワークとして行う(総勢40名程度)。現地参加者は大学生だけでなく、大学院生や社会人も含む。各種の薬剤耐性菌を同定する実習部分では、病原微生物学や同実習を履修済みの高学年の学生は手技や原理の一部を教える役割も担う。ベトナムでの薬剤耐性問題は我が国よりも深刻である。その生物学的、社会的背景を理解し、現地病院の医師や検査技師を交えて議論する。このワークショップでは最後に全体討論を行うが、現地参加者の中では残念ながら主役になれる医療科学類生はこれまで現われていない。東南アジア学生によく見られる「まっすぐ」「熱く」「一生懸命」という感覚が薄いのか、慣れない環境で疲れ果てているのか。いずれにせよ、主体性や積極性を低学年のうちに身につけるカリキュラムを強化しようと考えている。

C. その他

その他、東洋医学や生物多様性を学ぶ台湾成功大学サマープログラム、ロシア医療視察、ブラジル研究体験など、学生の興味ごとに異なる活動がある。派遣・招聘の両方に参加する学生もおり、

部分的な双方向交流となっている。各海外活動の詳細や参加者の感想を医療科学類のオンラインジャーナル Tsukuba Journal of Medical Science

(ISSN 1349-2969)にその都度掲載しているので、よろしければご覧頂きたい。

<https://med-sciences.md.tsukuba.ac.jp/tjms/>